

<全体分析>

試験時間 90分

解答形式

記述・計算・論述・選択

分量・難易 (前年比較) 分量 (減少・変化なし・増加) 難易 (易化・変化なし・難化)

出題の特徴

今回の第IV問は論述が中心となった。

その他トピックス

特になし。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記述 論述 計算	恒星の物理量	地学	計算問題が中心の展開だが、問4は惑星の質量に言及しておく方がよいだろう。	標準
II	論述 記述 計算 選択	大気 断熱変化と湿度	地学	内分法の計算が繰り返し出てくるので煩雑だが、計算そのものは簡単である。露点の高度変化を忘れないこと。	標準
III	記述 選択 論述 計算	沈み込み帯の 内部構造	地学	上部マントルと下部マントルの境界の意味を読み取っておくこと。計算そのものは易しいはずである。	やや易
IV	選択 論述 計算	地質平面図	地学	長文論述が多いので、比較的短時間の文章化が要求されている。最低限必要な事項を中心にすえて取り組むのがよい。	標準

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

相変わらず計算問題、論述問題の比率が非常に高い。解答用紙を見れば5cm×13cm程度の解答欄が15ほどとなっている。それに対する配点は7割以上に達するだろう。学習対策としては、計算・論述に十分時間をかけるべきであり、時間配分にも日頃から十分気をつけたい。